

漱石の愛した数字、あるいは<『明暗』の「純白」について>補遺

Lecture:<The Number that Soseki Loved>, or a Supplement to <“Pure-White” in Soseki’s *Meian*>

熊倉千之

Chiyuki KUMAKURA

はじめに

本稿は日本語日本文化学会秋季大会(2004年11月9日)において「漱石の愛した数字」と題して行った講演(本学E7-109教室、15:05pm-16:25pm)の原稿と、2000年3月に金城学院大学論集国文学編第42号に掲載した、この講演の主旨のもとになった拙論、<漱石『明暗』の「純白」について>の補遺である。まず講演で配布した資料を掲げる。

「うつくしき、極みの歌に、悲しさの、極みの想い、籠るとぞ知れ」

『草枕』(1) [シェレー「雲雀の詩」漱石訳]¹

1. 小川洋子『博士の愛した数式』

(新潮社2003)

「完全数」： $6=1+2+3$ 、

$28=1+2+4+7+14=1+2+3+4+5+6+7$ 、
496、8128、33550336、8589869056、……

2. 漱石のメッセージ

- a. 『思い出す事など』(1910-11)：子供と違って大人は、なまじい一つのものを十筋二十筋の文あやから出来た様に見窮める力があるから、生活の基礎となるべき純潔な感情を恣に吸収する場合が極めて少

ない。…たとい純潔でなくても自分に活力を添えた当時のこの感情を、余はそのまま長く余の心臓の真中に保存したいと願っている。(23)

- b. 『こゝろ』(1914)：「記憶して下さい。私はこんな風にして生きて来たのです。…(下55)

「…私は妻には何にも知らせたくないのです。妻が己の過去に対してもつ記憶を、成るべく純白に保存して置いて遣りたいのが私の唯一の希望なので、私が死んだ後でも、妻が生きている以上は、あなた限りに打ち明けられた私の秘密として、凡てを腹の中にしまっておいてください」(下56)

- c. 『明暗』(1916)：階上の板の間まで来て其所でびたりと留まった時の彼女は、津田にとって一種の絵であった。彼は忘れる事の出来ない印象の一つとして、それを後々迄自分の心に伝えた。…(清子の)両方の頬と額の色が見る見るうちに蒼白く変って行った。(176)

3. 「白」の機能：

- a. 「医者は白い…上着」(1)、「白いベッドの上に…」(2)、「細君は白い織い手を…」

(3)、「細君は色の白い女」(4)

- b. 南東の開いた二階は幸に明るかった。障子を開けて縁側へ出た彼女は、つい鼻の先にある西洋洗濯屋の物干を見ながら、津田を顧みた。

「下と違って此所は陽気ね。そうして一寸可いお部屋ね。畳は汚れているけれども」…

日に照らされてきらきらする白い洗濯物の色を、秋らしい気分で眺めていた津田は…時代のために多少燻ぶった天井だの床柱だのを見廻した。(40)

- c. 彼等は突然変な穴から白い物を担いで屋根へ出た。それから物干へ上って、その白い物を隙間なく秋の空へ広げた。此所へ来てから、日毎に繰り返される彼等の所作は単調であった。しかし勤勉であった。それが果して何を意味しているか津田には解らなかつた。…

表は何時か風立った。洗濯屋の前にある一本の柳の枝が白い干物と一所になって軽く揺れていた。それを掠めるように懸け渡された三本の電線も、余所と調子を合せるようにふらふらと動いた。(114)

- d. 彼女の頭は急にお秀から、吉川夫人、吉川夫人から津田へと飛び移った。彼女は何がなしに、この三人を巴のように眺め始めた。

「ことによると三人は自分に感じさせない一種の電気を通わせ合っているかも知れない」(143)

- 延子＝小林（心の外科医）の看護婦＝主人公津田の心の問題を治療する友人小林のメスの「延長」機能。

[cf.]「柳＝清子」の配置：「彼（手品師）の後に取り残された一本の柳を盾に…」(21)、「色の生っ白い変な男が柳の下をう

ろうろ」(50)、「突当りに霞が関の見える大通りの片側に、薄暗い影をこんもり漂わせている高い柳などが、離れにくい過去の匂のように」(89)

4. 『明暗』の構造：

- a. 医者は探りを入れた後で、手術台の上から津田を下した。(1)

- b. 「根本的な治療という」と「心の手術＝心を「西洋的に洗濯」する＝弁証法的解決（ジンテーゼ）」

「切開です。切開して穴と腸と一所にして仕舞うんです。すると天然自然割かれた面の両側が癒着して来ますから、まあ本式に癒ようになるんです」[津田の未練を解消するため、清子／延子を一所にして仕舞う]

津田は黙って黙頭いた。…南側の窓下に据えられた洋卓の上に一台の顕微鏡が載っていた。医者と懇意な彼は先刻診療所へ這入った時、物珍しさに、それを覗かせて貰ったのである。その時八百五十倍の鏡の底に映ったものは、まるで図に撮影したように鮮やかに見える着色の葡萄状の細菌であった。(1)

- c. 「大変、忘れものがあるの」

車上で振り返った津田は、何も云わずに細君の顔を見守った。念入りに身仕舞をした若い女の口から出る刺戟性に富んだ言葉のために引きつけられたものは夫ばかりではなかつた。車夫も棍棒を握った儘、等しくお延の方へ好奇の視線を向けた。傍を通る往来の人さえ一瞥の注意を夫婦の上へ与えないではいられなかつた。

「何だい。何を忘れたんだい」(40)

[8x5=40]

- d. 強い意志がお延の身体全体に充ち渡った。朝になって眼を覚ました時の彼女に

は、怯懦ほど自分に縁の遠いものはなかった。(80) [80 = 8 × 10 = 40 + 40]

- e. 「本当よ。何だか知らないけれども、あたし近頃始終そう思ってるの、何時か一度このお肚の中に有ってる勇気を、外へ出さなくっちゃならない日が来るに違ないって。…いいえ生涯のうちで何時か一度じゃないのよ。近いうちなの。もう少ししたらの何時か一度なの」

「益悪くなるだけだ。近き将来に於て蛮勇なんか亭主の前で発揮された日にゃ敵わない」

「いいえ、貴方のためによ。だから先刻から云ってるじゃないの、夫のために出す勇気だって」(154)

- f! 下から上って来た医者には、その時の津田が如何にも退屈そうに見えた。顔を合せるや否や彼は「如何です」と訊いた後で、「もう少しの我慢です」とすぐ慰めるように云った。(115) [暗から明へ]
- g. 「行って入らっしゃい。小林さんによるしくってお延が云ってたと忘れずに伝えて下さい」

津田は振り向かないで夕方の冷たい空気の中に出た。(154) [154 - 114 = 40]

- h. 漱石が書き残した回数：228 - 188 = 40
『明暗』は総二階建て建築（上下階は、それぞれ一週間ずつ経過する）
[暗]：1 …… 40 …………… 80 ……114
[明]：115 …… 154 ……188 < 189 ……194 ……228 >

5. 未完の部分（40章分）の推測：

- a. 「娘の父が青年に向って、あなたは私の娘を愛してお出なのですかと訊いたら、青年は、愛するの愛さないのっていう段じゃありません、お嬢さんの為なら死のうとまで思っているんです。あの懐かしい眼で、優しい眼遣いをただの一度でもして頂く事が出来るなら、僕はもうそれ

だけで死ぬのです。すぐあの二百尺もあるという崖の上から、岩の上へ落ちて、滅茶苦茶な血だらけな塊りになって御覽に入れます。と答えた。娘の父は首を掉って、実を云うと、私も少し嘘を吐く性分だが、私の家のような小人数な家族に、嘘付が二人出来るのは、少し考えものですからね。と答えた」

「愛と虚偽」

自分の読んだ一口噺からこの二字を暗示された彼は、二つのものの関係をどう説明して可いかに迷った。彼は自分に大事なある問題の所有者であった。(115)

- b. →(194)：津田は余裕のある清子に対し、「馬鹿になって進む」決意を固める。

→(202)：(一方)お延が温泉場に向かう。津田が古手紙を庭先で焼く姿(89)などが蘇る。

→(210)：津田は清子に対決、清子の眼の光によって津田の虚偽が暴かれる。津田は滝壺へ投身？

→(218)：お延は二人を垣間見、津田の後を追って投身。清子（純）と延子（白）は本来の心の属性。

→(226)：二人はもう一組の男女「浜のお客」に救われる。津田は、お延が「勇気」を出したのだと知る。

→(228)：coda: 皮肉にも津田夫婦は清子に看病される結果となるが、津田の心は純白に洗われる。

- c. 則天去私：「多少燻った天井」(40)、医者への質問には充分の自信があった。津田は天井を見ながら答えた。『痛かありません。』『彼は大きな眼を開いて天井を見た。その天井の上には綺麗に着飾った

お延がいた。」(42)、「天井の上で、時計と睨めっ競でもするように、手術の時間を計っていたのである。」(43)

6. 漱石作品中の28

a. 『明暗』(1916)：

「ええ。十二時二十分よ。貴方の手術は丁度二十八分掛ったのね」

時計の蓋を開けたお延は、それを眺めながら精密な時間を云った。津田が手術台の上で俎へ乗せられた魚のように、大人しく我慢している間、お延は又彼の見詰めなければならなかった天井の上で、時計と睨めっ競でもするように、手術の時間を計っていたのである。

b. 『思い出す事など』(1910-11)：

学校を出た当時小石川のある寺に下宿していた事がある。…一年ならずして余は松山に行った。それから又熊本に移った。熊本から又倫敦に向った。和尚の云った通り西へ西へと赴いたのである。(二十八)

c. 『草枕』(1906)：

…この御婆さんに石臼を挽かして見たくなくなった。然しそんな注文も出来ぬから、「ここから那古井までは一里足らずだったね」と別な事を聞いて見る。

「はい、二十八丁と申します。旦那は湯治に御越しで……」

d. 『吾輩は猫である』(1905)：

「…迷亭一流の喩えを以て寒月君を評すれば彼は活動図書館である。智識を以て捏ね上げた二十八の弾丸である。この弾丸が一たび時機を得て学界に爆発するなら、——もし爆発してみ給え——爆発するだろう——」迷亭はここに至って迷亭一流と自称する形容詞が思う様に出て来ないので…

e. 五言古詩「古別離」(1899/4)：

上樓湘水緑／…／徒倚暗淚催／二八纔
畫眉／早識別離哀／再會期何日／臨江思
邈哉／徒道不相忘／…（…／二八〔十
六歲〕わずかに眉を画きしに／早くも別
離の哀しみを識る／再會何の日をか期せ
ん／江に臨んで思いはるかなるかな／徒
にいう相忘れずと／）〔吉川幸次郎『漱
石詩注』1967〕

（実際の講演は、必ずしもこの項目の順序には従わず、講演中の気分や聴衆のリアクションによって、いろいろな項目へ飛んだり跳ねたりしたが、本稿では、講演の主要な部分を上のハンドアウトに沿って再編成し、{ }内は、時間の関係で講演中に述べられなかった部分、あるいは、ぼくの先行拙論の補遺や補足説明などである。）

1.

このお招きをいただいてから、演題についてあれこれ考えました。とてもきれいな心の持ち主であった漱石にとっては、今日11月9日という日が特別な日、記念すべき日であったと気がつきまして、漱石が私たちに残してくれたメッセージ、「純潔な感情をそのまま長く自分の心臓の真中に保存したい」ということを、未完におわった最後の作品『明暗』を中心にお話しすることにしました。

表題の「漱石の愛した数字」は、今年のベストセラーだった、小川洋子の『博士の愛した数式』をもじったものですが、この小説は、交通事故の後遺症で80分しか記憶が保てない数学者の老人と、なんでも記憶できてしまいそうな小学生の男の子との友愛の物語です。この博士は記憶が80分しか続かないという理由から、{大人の邪気がなく} いやでも純潔な心しか持続できないという設定になっています。ですから、男の子との付き合いは数字

という純粋な価値で結ばれ、初めから大人の価値判断、邪気邪念に惑わされることがないので。{ある意味で「純愛」物語というもののエッセンスがここにあるように読めます。}

ところで、この小説の中に出てくる不思議な数のひとつが「28」で、これは「完全数」といわれて {古くから数学の世界では知られていたようです}、小川洋子はそのことを数学の本で知り、これで行けると思ったのでしょう。その最初の数は6で、これは1でも2でも3でも割り切れて、その3つの {約} 数を足すと6になる。そして又、1、2、3と順番に足しても6になる。こういう数は本当に稀にしかなくて、6の次の完全数は28です。お手元のハンドアウトのアンダーラインを引いたところをご覧ください。なるほど28とはそういう数です。では、その次の完全数はというと、496、その次は8128、それからだんだん間遠になって、8桁の数が見えただ一つ、次は何と10桁の85億まで探して、やっと6つ目が見つかるという、大変珍しいものです。

2.

今日は28という数を漱石の作品にからめたのですが、それはちょっと後回しにして、純潔な感情についての漱石のメッセージについて考えます。

ハンドアウト2a『思い出す事など』(1910-11)からの引用文をご覧ください。[() 内の数字は、新聞連載の回数]

子供と違って大人は、なまじい一つのものを十筋二十筋の文から出来た様に見窮める力があるから、生活の基礎となるべき純潔な感情を恣に吸収する場合は極めて少ない。…たとい純潔でなくても自分に活力を添えた当時のこの感情を、余はそのまま長く余の心臓の真中に保存し

たいと願っている。(23)

『思い出す事など』は、漱石がいわゆる修善寺の大患で、30分の仮死状態を体験したあと、自分の半生を顧みた随筆ですが、この文言は、次の2b『こゝろ』(1914)の「先生と遺書」の末尾とよく似ています。「記憶して下さい。私はこんな風にして生きて来たのです。…」(下55)は、ほとんど漱石の全作品のエピグラフになることばですが、この小説の最後、締めくくりの部分は以下のようになっています。

「…私は妻には何にも知らせたくないので。妻が己の過去に対してもつ記憶を、成るべく純白に保存して置いて遣りたいのが私の唯一の希望なので、私が死んだ後でも、妻が生きている以上は、あなた限りに打ち明けられた私の秘密として、凡てを腹の中にしまっておいてください」(下56)

近年この『こゝろ』の最後の文言をめぐる、フェミニストたちから抗議されたりしていますが、女は真実を知らされなくてもいい、というような乱暴な意味ではなくて、上の『思い出す事など』の文章から明らかなように、ここには人の心の純潔を何とか保存したいという漱石の願いが籠められているのです。もともと『こゝろ』は、短編を重ねる意図のもとに書き出されたということですが、『こゝろ』の終わりの文言をはっきり説明しようとして書いたのが『明暗』という作品だというのが、ぼくの読みです。

ここで、『明暗』の筋を簡単にいいますと、津田由雄という30歳のサラリーマンが主人公で、延子さん、お延という女性と結婚して半年になるのだけれど、結婚前に清子さんとい

う女性と付き合っていて、その人と結婚するつもりでいたのに、その清子さんは、あるとき突然自分に背を向けてほかの男と結婚してしまった。この女性がなぜ自分から離れていったのかがよくわからない。小説は、主人公津田が痔の手術のために、近くの医者のところへ入院しなければならなくなるところから始まります。そこへいろいろな人が見舞いに来るのだけれど、入院費とか、日ごろ結構派手な暮らしをしていて自分のサラリーだけでは足りないところへ、お父さんから毎月貰っていた仕送りが来ないという事態になります。で、他人から金を借りる算段をしなければならなくなって、お延がいろいろな人と関わっているうちに、自分の夫にだれか他に女がいるのかもしれないと疑える、告げ口陰口が気になります。一方、二人の結婚の仲人をした主人公津田の上司の奥さん、吉川夫人といいますが、この人は津田が婚前につき合っていた清子さんをよく知っています。そして吉川夫人が病院へ来て、津田しかいないところで、清子さんは今湯治客として温泉に行っているから、そこへ出かけて行って未練を払拭して来なさいと言う。そこで、お延さんにはただの湯治だごまかして、津田は一人で温泉宿へでかける。そこへ着いた晩のこと、温泉につかってから廊下へ出て自分の部屋がわからずに迷っているときに、突然上の階の廊下に人の気配がする。そして、この2cの場面になります。

階上の板の間まで来て其所でびたりと留まった時の彼女は、津田にとって一種の絵であった。彼は忘れる事のできない印象の一つとして、それを後々迄自分の心に伝えた。…（清子の）両方の頬と額の色が見る見るうちに蒼白く変わって行った。(176)

驚きのため清子は硬くなり、顔面蒼白になるのですが、この場面の「後々まで自分の心に伝えた」は、文章としてちょっと変です。なぜって、「後々まで」という時間はこれからくるはずですから。ここは「後々まで(覚えているように)自分の心に伝えた」とでも書くべきでしょう。漱石はうっかりして間違った？いやいや、漱石はこんな文章を書き損じするような作家ではありません。じゃ、どうしたんだ。この表現には、漱石の過去の経験が重なっていると感じます。つまり、漱石の初めのメッセージ、さっきの『思い出事など』の「余はそのまま長く余の心臓の真中に保存したいと願」っていた「純潔な感情」がここに忍び込んだんだと思うんです。

ここにはぼくが日ごろ日本語教育の教室で問題にしている、西欧語のテンスの問題、日本語では不可能な西欧語で書かれる小説の文体を、なんとか日本語化しようとした漱石の悪戦苦闘がみてとれます。漱石は実際、『明暗』の地の文、というのは括弧に入れて書く会話文以外の文章ですが、そのほとんどすべて、96%を「タ」という助動詞で終わらせました²。そうすることで、西洋の近代小説の文体の基本にある、過去形による統一を図ろうとしたようです。しかし、もともと日本語の「タ」は過去ではなく、古くからの日本語助動詞の「タリ・ケリ」と同様の「イマ」という時間の意味を持ち続けていますから、はじめから無理な試みなので、そういう理由から『明暗』は読みにくいところがあります。けれど、この問題に関わっていると、ぼくの話が終わらなくなりますから、先に進みます。とにかく、この場面で確かなことは、「…たとい純潔でなくても自分に活力を添えた当時のこの感情」を、漱石はここに書き留めたかったのだと考えてください。

漱石の『草枕』には、ぼくがこのハンドア

ウトのはじめに掲げたシェレーの「雲雀の詩」の漱石訳が嵌め込まれています。シェレーの詩では「悲しみの極みの想いを告げている(<... are those that tell of saddest thought>)」とは言っていますが、「それを知れ」とは言っていない。ですからここは、漱石がこの『草枕』という作品が、自身の「悲しみの極み」を書いているのだと読者に知ってほしいのです。それはともかく、この小説の終わりには、「それだ、それだ、それが出れば晝になりますよ」と那美さんの表情に憐れを見て、そこで主人公の心の中で晝が完成したとありますが、それに繋がる晝のようなものを、この『明暗』の、未練を残している清子さんと再会した場面で、津田は「心臓の真中に保存」しておきたい「純潔な感情」として感じたのです。

今から88年前の今日11月9日、漱石はこの『明暗』の、清子に再会するこの場面、176回目を書いていました。どうしてそこまでわかるかということ、漱石は本当に几帳面な人で、5月18日に書き始めて³、新聞連載の1回分を毎日書いて来て、この日が176日目だからです。ですから今日は記念になる日だと最初に申し上げたのですが、漱石はこのあと12日間、188回まで書いた翌日、11月22日に、持病の胃潰瘍が悪化して、半月後の12月9日に死んでしまいました。「注射、注射して、死ぬと困るから」とお医者さんに死の床で言ったと伝えられています。「則天去私」ということを後で説明しますが、「天に則って私を去る」というのが漱石晩年の生活規範だったとされて、そういう悟りの境地を拓いた人にしては往生際が悪いなどと言われもしました。しかし、この『明暗』を完成しなければ死んでも死にきれない思いだったと思います。

3.

主人公津田が温泉宿の廊下で清子さんに出会う場面で、彼女は顔面蒼白になります。『こゝろ』の「純白」とでは意味がちがいますが、今日のぼくのテーマは小説『明暗』の「純白」ということなので、「白い」イメージを取りあえず『明暗』の中に探していきます。3aを見ていただきます。この作品の冒頭の4回にひとつずつ「白い」という言葉が見つかります。これは偶然ではなくて、漱石は意図的に新聞小説の最初の4日分に毎日一度ずつこの「白い」ということばを書き込んで行ったのです。{そしてこの4つ目の「白い」を、お延の「輝く瞳は漆黑」というように繋げています。こうしてお延の体の特徴としての「白黒」が、『明暗』という題名に重なって機能すると作者は考えるわけです。第6回では、「彼女(お延)は明るい電燈の光に白い封筒を照らした」というように、『明暗』の「明」とお延の「白」とを彼女の行動の中で一つにしています。}

最初の二つの「白」が医療に係わり、次の二つがお延に関わるとなれば、お延は医療と無関係ではないこととなります。ここからお延がこの作品で、夫の心の病、すなわち逃げられた女に対する未練を払拭することに手をさし「延」べるといふ、作者のプロット(手の内)が見えてきます。

次の3bは、津田が手術を受ける前に、これから寝泊りする医院の二階にある病室からみた外の眺めです。

南東の開いた二階は幸に明るかった。障子を開けて縁側へ出た彼女は、つい鼻の先にある西洋洗濯屋の物干を見ながら、津田を顧みた。

「下と違って此所は陽気ね。そうして一寸可いお部屋ね。畳は汚れているけれ

ども」…

日に照らされてきらきらする白い洗濯物の色を、秋らしい気分で眺めていた津田は…時代のために多少燻ぶった天井だの床柱だのを見廻した。(40)

洗濯屋の物干に干された「白い洗濯物」と、この「明るい」風景が、主人公の医療、心の「洗濯」に係わっていることが示唆されています。{わざわざ「西洋洗濯屋」というのが、西洋的に洗うということだとすると、その方法は明らかにされていませんが、ぼくはこの小説の手法からして「弁証法」だと考えます。つまり、対立する二つのものを戦わせることによって、新たに解決の道を探す方法です。対立する関係は、津田vs.小林、津田vs.お秀、津田vs.吉川夫人、などなど本丸の延子vs.清子以外にもいろいろ考えられます。そしてそれぞれの人が、それぞれ弁証法的な解決の道を探していることも、たくさんの会話文を含むテキストから明らかです。}

次の3cですが、今度は手術後の同じ場所の風景です。

彼等は突然変な穴から白い物を担いで屋根へ出た。それから物干へ上って、その白い物を隙間なく秋の空へ広げた。此所へ来てから、日毎に繰り返される彼等の所作は単調であった。しかし勤勉であった。それが果して何を意味しているか津田には解らなかった。…

表は何時か風立った。洗濯屋の前にある一本の柳の枝が白い干物と一所になって軽く揺れていた。それを掠めるように懸け渡された三本の電線も、余所と調子を合せるようにふらふらと動いた。(114)

津田には「勤勉」の意味がわからないと、わざわざ作者は言います。こういうときは、漱石の小説の創り方として必ず読者に向けてのメッセージがあるのです。ですからここは、津田にはわからないけれど、読者には、津田の心の手術が津田が意識しないところで着々と準備されていることを物語っているのだよ、というわけです。みなさんは、こういうところで、なぜ洗濯屋の洗濯物がみんな白いんだ？色のついた物だってあるだろう、などと考えないでください。これは小説なんですから。それでは、せっかく作者が強調したくて書いている意味が見えなくなる。

「表は何時か風立った」は、ここからいよいよ何かが始まるということですが、「一本の柳の枝が白い干物と一所になって」というところにご注目ください。「白い干物」がお延の表象なら、「一本の柳の枝」は、実はこれが清子なのです⁴。また、「それを掠めるように懸け渡された三本の電線」とは、お秀、吉川夫人、津田のこと。しかし、このなぞは143回目まで明かされません（「ことによると、三人は自分に感じさせない一種の電気を通わせ合っているかも知れない」）。

4.

こうして見てゆくと、だんだんこの作品の形が見えてきます。4の「『明暗』の構造」というところをご覧ください。

4aはこの作品の冒頭の一行、4bはそれに続く小林医師の診断のことばです。

医者は探りを入れた後で、手術台の上から津田を下した。…

「根本的な治療という」と

「切開です。切開して穴と腸と一所にして仕舞うんです。すると天然自然割かれた面の両側が癒着して来ますから、まあ

本式に癒るようになるんです」

津田は黙って黙頭いた。…

{この小説の書き出し、「手術台の上から津田を下した」というのは何の変哲もない文章ですが、ここには実は作者の仕掛けがあります。『明暗』という題名の「明から暗」の方向、つまり主人公の気分を暗くさせる（黙って黙頭させる）のは、医者が下す診断です。}「根本的な治療」が必要だというのは、痔の手術をするという枠の中に、主人公の本当の病気は、実はその精神にあって、これを「根本的」に治療しなければと、作者はほのめかしているのです。津田は自分が結婚するつもりでいた清子が、突然自分から離れて行って、他の男と結婚してしまったことが、どうしても納得できず、いまだに未練を感じています。{津田の心が癒されるためには、「切開して穴と腸を一所にして仕舞う」ことが必要だということになります。それは、「切開して」清子と延子を「一所にして仕舞う」⁵こと、そうすれば、津田の気持ちは揺れなくなる、「すると天然自然割かれた面の両側が癒着して来ますから、まあ本式に癒るようになるんです。」つまり夫婦が和合する物語として目論まれていることになります。}

小林医師が癒るというからには、この小説の終わりでは、主人公のこころの病は癒るはずです。癒らなければなりません。それが小説の論理というものです。そう読まなければ、この小説は小説になりません。ところが世の中の『明暗』論には、そうでない議論がいっぱいあります。たとえば、小宮豊隆という、十数年漱石の身近にいた弟子の一人は、津田の奥さんの延子は罰せられて死ななければならないと言っていますし、ぼくの高校の先輩で数年前自殺してしまった評論家で漱石研究家としても著名だった江藤淳は、津田は死な

なければならないと言っています。また、漱石が書き残した部分を、漱石の文体に似せて書いた水村美苗の『続 明暗』では、津田は痔が治らず、前よりもっと悪くなるという読みです。みなさん全く読めていません。{それは、だれもこの小説の主題、つまり漱石がその『文学論』で、「F」[焦点的印象、または観念]といったもの、この小説では「愛と虚偽」(つまり「明暗」)、あるいは「f」(feeling)、というのは「F」が惹き起こす「情緒」、ここでは「純白」、に目をむけていないからでもあります。}

津田は黙って黙頭いた。(さっきのぼくの引用箇所、2bに戻ってください) …南側の窓下に据えられた洋卓の上⁶に一台の顕微鏡が載っていた。医者と懇意な彼は先刻診療所へ入った時、物珍しさに、それを覗かせて貰ったのである。その時八百五十倍の鏡の底に映ったものは、まるで図に撮影ったように鮮やかに見える着色の葡萄状の細菌であった。

これは津田の痔疾が結核性のものではないことを、医者が説明する手だてとしての顕微鏡ですが、もちろんそれは表面的なことで、実はこれは『明暗』の構造をしっかりと見てくれという漱石のメッセージです。顕微鏡の倍率が850倍というのは、何か意味ありげな数値です。900倍とかでもいいじゃないですか。ですから、たとえば8の倍数、その5倍なら40、10倍なら80のような新聞連載の回数に、「図に撮影ったように鮮やかに見える」ものを考えているのではないかということです。

次の3cをご覧ください。

「大変、忘れものがあるの」

車上で振り返った津田は、何も云わずに細君の顔を見守った。念入りに身仕舞をした若い女の口から出る刺戟性に富んだ言葉のために引きつけられたものは夫ばかりではなかった。車夫も棍棒を握った儘、等しくお延の方へ好奇の視線を向けた。傍を通る往来の人さえ一瞥の注意を夫婦の上へ与えないではいられなかった。 (40)

「大変、忘れものがあるの」というのが、「刺戟性に富んだ言葉」というのですが、「傍を通る往来の人さえ一瞥の注意を夫婦の上へ与えないではいられなかった」というほど、刺戟性に富んでいるのはなぜか。実際お延が忘れたのは、筆筈にかける鍵の束で、夫婦がそろって外出するときには、大切なものは鍵のかかる筆筈にしまっていく、というのが習慣だったとしても、なぜ「往来の人」が注目しなければならないのか、変じゃありませんか。実はこの新聞小説の第40回目は、小説の構造として、とても大切なところなんです。ここに漱石はこの小説の鍵になる言葉をたくさん置いたからです。ですから、「傍を通る往来の人」とは、実は我々この『明暗』を読んでいる読者のことで、漱石は、「ここにこの小説を解く鍵を置いておくから」と注意してくれているのです。そうした鍵は、さっき説明したように、「白い洗濯物」「天井」のようなものなのです。{そうして、津田の心の洗濯の鍵はお延が握っているわけです。}

[時間の関係で、これにつづく部分はほとんど講演では割愛された。]

{津田の心の洗濯が西洋流だとすると、この小説の創り方も西洋流で、これは科学的とか弁証法的とか、明と暗からジンテーゼに導くその論理を数学的に構築するという、

ホメロスの『イリアス』からトーマス・マンの『魔の山』まで西欧では小説作りの常套手段であるものを漱石が使っているということです。

漱石はこの小説を毎日、新聞の一回分書いていました。そのときの心境を尋ねられて、「苦痛、快樂、器械的」と芥川など若い作家への手紙で答えています。書き出して半年後には死んでしまう漱石ですが、すでに持病の胃腸はかなりやられています。当時の新聞小説一回分は1800字、つまり原稿用紙四枚半ぐらいだったようですが、痛いお腹を抱えながら自分の理想からはかなり遠い俗人たちを書くのは「苦痛」だったでしょう。でも、こうして自分の小説を創る快樂は、苦痛を乗り越える唯一のモチベーションでしたし、「八百五十倍」のように、創る方針を設定しておけば、あとはかなり「器械的」に創作作業が進んだのでした。}

8掛ける5の40回目は、この小説の一つの区切りなのです。それは、ぼくが先ほどから拘っている「白い」ということば {この小説全体の「情緒」、漱石が「f」と呼んだもの} を作者は小説の冒頭で強調し、この40回目と114回目で再登場させたのです。ここでは細かく見ていく時間はありませんが、この小説には津田の友人で社会主義者を自認している小林という男が出没します。この小林は医者の小林先生とはなんの関係もない人なのに、小林という紛らわしい名前がついています。漱石はうっかりしたのでしょうか。とんでもない、実はこの友人の小林こそ、津田の心の病を手術する外科医なのです。それでは、お延は？そうです、小林の作業を手助けする看護婦役です。お「延」とは、実に医者（小林）のエクステンション＝主人公津田の心の問題を治療する外科医（友人小林）の延長機能を果たす役目を担っているのです。小説の前半

でお延はこの小林にさんざん苛められます。泣かされた挙句、お延の知らない津田の秘密を知っているみたいなことまで、ほのめかされます。ですから、そんな人に手を貸すはずがない、まさか、とお思いかもしれません。でも、つぎのお延の言葉をご覧ください。

[4g]「行って入らっしゃい。小林さんによろしくってお延が云ってたと忘れずに伝えて下さい」

津田は振り向かないで夕方の冷たい空気の中に出た。(154)

ここまで来たら、ぼくが何を皆さんに言いたくて、一人で興奮しているかお判りでしょう。そう、この154回目は、この小説の後半の40回目だからです。そこでは彼女の「勇気」を出す決意が語られます。その始動はちゃんと80回目にあったのでした。4eをご覧ください。

「本当よ。何だか知らないけれども、あたし近頃始終そう思ってるの、何時か一度このお肚の中に有ってる勇気を、外へ出さなくっちゃならない日が来るに違いないって。…いいえ生涯のうちで何時か一度じゃないのよ。近いうちなの。もう少ししたらの何時か一度なの」

「益悪くなるだけだ。近き将来に於て蛮勇なんか亭主の前で発揮された日にゃ敵わない」

「いいえ、貴方のためによ。だから先刻から云ってるじゃないの、夫のために出す勇気だって」(154)

[cf: 4d] 強い意志がお延の身体全体に 充ち渡った。朝になって眼を覚ました時の彼女には、怯懦ほど自分に縁の遠いものはなかった。(80)

この小説の前半はどこで終わるかお判りですね。154引く40は第114回ということです。さっきの114回は偶然ではなかったのです。ぼくの話をも半信半疑で聞いておられる方は、つぎのテキストで納得されると思います。

4fをご覧ください。びっくりマークをつけたところです。

下から上って来た医者には、その時の津田が如何にも退屈そうに見えた。顔を合せるや否や彼は「如何です」と訊いた後で、「もう少しの我慢です」とすぐ慰めるように云った。…(115)

この書き出しの文に出会ったとき、ぼくはヤッターと叫びました。その晩はどうとう眠れませんでした。もう六、七年まえのことです。この文は見事にこの小説の冒頭の一文に照応していたからです。「上から下ろす」「下から上がる」こんなに簡単な文句でこの小説の構造を表現する。これが漱石のこの小説を創る「快楽」の一部だったのです。もっと細かく見ていくと、この小説は、全体がその題名のごとく、『明暗』の明の部分と暗の部分が同じ分量で初めから計画されていたとわかります。それならば、 $114 \times 2 = 228$ 、つまり228回で大団円を迎えるよう総二階建てで設計されているわけです。そこで、漱石が完成できなかったのは、 $228 - 188 = 40$ 、40回分だったこととなります。

5.

{こうした構造から、漱石が書き残したところに、ある程度迫れる視点が見えてきました。たとえば、お延の勇気はどういう風に出せるのか、津田はどういう風に「馬鹿になって進む」のか。「愛と虚偽」というこの小説

の主題の、津田の「虚偽」はどう「愛」へ転進可能か。そこで、後半冒頭、115回目に半ば冗談のように持ち出された津田が読んだ本のなかの「一口噺」にある「青年」の言説は、今となっては津田の唯一残された行動なのかもしれません。

[5a]「娘の父が青年に向って、あなたは私の娘を愛してお出なのですかと訊いたら、青年は、愛するの愛さないのっていう段じゃありません、お嬢さんの為なら死のうとまで思っているんです。あの懐かしい眼で、優しい眼遣いをただの一度でもして頂く事が出来るなら、僕はもうそれだけで死ぬのです。すぐあの二百尺もあろうという崖の上から、岩の上へ落ちて、滅茶苦茶な血だらけな塊りになって御覧に入れます。と答えた。娘の父は首を掉って、実を云うと、私も少し嘘を吐く性分だが、私の家のような小人数な家族に、嘘付が二人出来るのは、少し考えものですからね。と答えた」

「愛と虚偽」

自分の読んだ一口噺からこの二字を暗示された彼は、二つのものの関係をどう説明して可いかに迷った。彼は自分に大事なある問題の所有者であった。(115)

津田のお延に対する「虚偽」の愛は、お延の白さによって洗われなければならないのです。ですから、「大事なある問題の所有者」は、温泉宿の下女のいう「本当に療治の目的でお出での方はみんな下へ入らっしゃる」という「滝」に飛び込まなくてはならなくなるのではないのでしょうか。そうなれば、お延の「勇気」を出す場面も自然に設えられることになるわけで、彼女は夫を救うために滝壺に飛び込む、しかし、それは女手では無理なの

で、たまたま居合わせた「浜のお客」のカップルとかが手を差し延べているかもしれませんが。そこには再び「顔面蒼白」な清子がいてもおかしくはないでしょう。

一口噺の主人公のように、津田が血だらけになるかどうかわかりませんが、再びお延の看病が必要になるかもしれません。しかし、江藤淳先生がいうように津田は死ななければならぬというように読んではいけません。「もう少し辛抱です」と医者が太鼓判を押した以上、この小説は悲劇に終わってはならないからです。5cをご覧ください。さっきぼくが第40回のところを問題にしたとき、3bのところでも二階の病室の天井がなんとなく津田の眼に入っていますが、そのあと津田が手術を受けているとき、何度も手術室の天井を見えています。天井の上にはお延がいて、この天井と手術の28分が繋がっています。ということは、後に漱石の生きるモットーとして話題にされる「則天去私」、天に則って私を去る、の「天」をこの小説の最後で津田の新しい生き方に繋げようという意図を、作者が持っていたのかもしれないと推測できるからです。「則天去私」を漱石伝説だとして葬り去ろうとやっきになったのが江藤淳です。江藤はもちろんこの「天井」には気づいていませんでした。というか、まったく『明暗』を精読していませんでした。}

6.

そこで、やっとぼくの話は、完全数28に帰ります。

{漱石がこの数字の意味を知っていたかどうかわかりませんが、漱石作品を検索すると28という数が、お手元のハンドアウト6aから6eのように見つかります。岩波書店の漱石全集には索引篇として分厚い一冊があって、漱石が書いたほとんどあらゆる言葉が掬いあ

げられていますが、28関連は6d一つしかありません。ですから、これはこれまであまり誰も注目してこなかったけれど、漱石が愛した数字だ、というのがぼくの自慢のポイントです。}

6aをご覧ください。12時20分に終わった津田の手術は28分かかったというのですが、津田がその精神が癒されるのにも同じ時間がかかるのであれば、これまでの漱石の長編小説の平均的な長さの128回位ではとても終わらず、どうしても228回まで創ろうと、漱石は最初から計画したのです。それはこの28という数に象徴性をもたせたかったからですが、ここには漱石の例の「余の心臓の真中に保存したい、純潔な感情」が反映しています。

明治27年、そのとき漱石は数え年で28歳でしたが、ある女性に恋する身に何かが起こったのです。それは生か死かどとハムレットのように悩むほど、漱石にとって重大な事件だったようです。その具体的な状況や真相を知る資料は、注意深く漱石とその関係者によって隠滅されてしまいました。{しかしその痕跡は、この『明暗』にもわずかに、たとえばある日津田が庭に出て、古い手紙を焼いているのをお延が眺める場面(89)などに残されています。実際、漱石が熊本の五高、今の熊本大学で教えていた時代、というのはまさに津田のように漱石は30歳でしたが、庭先で漱石が古い手紙を燃やしているのを鏡子夫人が見たといいます。この小事件は、小説『明暗』のなかで、「どうして彼の女は彼所へ嫁に行ったのだろう。…そうしてこの己は又どうして彼の女と結婚したのだろう」(2)という、「自分に大事なある問題の所有者」であった漱石が、当時その未練を払拭できていなかったことを意味します。鏡子夫人は明治31年6月、梅雨どきで水かさが増した熊本の井川『草枕』の「那古井」に反映」に身を投げました。

この時は、近くで釣りをしていた人に助けられ、新聞沙汰にもならず済んだということです。}手術が28分かかったことは、漱石が東京の、将来を約束された仕事を擲って、四国の松山中学の英語教師になる明治28年に重なります。ある心の整理を漱石は28歳のときにしたのです。

6bをご覧ください。

『思い出す事など』、先ほどの「純潔な感情」というメッセージがある、そのちょっと後ですが、「学校を出た当時小石川のある寺に下宿していた事がある。…一年ならずして余は松山に行った。それから又熊本に移った。熊本から又倫敦に向った。和尚の云った通り西へ西へと赴いたのである。」(二十八)とあります。この小石川の下宿へは明治27年10月に引越したとされています。修善寺で九死に一生を得て、自分の半生の「思い出」を語るこのエッセーが、新聞連載の28回目に及んだとき、あの自分の28歳の小石川のお寺住まい、それからその暮れには鎌倉で座禅を組んでいますが、明治28年の松山、翌29年からの熊本というように、自然に「思い出」されたのでしょう。{実は、明治28年12月、それも28日、漱石はこの日を選んで、東京でその後夫人になる鏡子さんとお見合いをしています。}この漱石の28歳の決断はその後の漱石を日本近代最高の作家に育てました。作家誕生の物語、あるいは漱石がこれで自分は芸術家としてやっていけると確信した『草枕』にも、自らの人生の里程標として、茶屋の婆さんの口を通して、那古井の里までの道のりを「二十八丁」と言わせています。

次の6dをご覧ください。『吾輩は猫である』では、学者の卵である寒月君に、28サンチ砲で学会テロを考えさせたりしているわけです。漱石はイギリス留学から帰って、東大の英文学の先生になりました。そのときそれ

まで誰も試みなかった新しい『文学論』で学会を吹き飛ばそうと考えたのです。ここの寒月君のように、だんだんこのテロ計画は戻つぼみに終わりましたが。

漱石の愛した数字28の原点は、6eの「二八わずかに眉を画きしに／早くも別離の哀しみを識る、云々」の漢詩に見える女性の面影です。この「二八」は女性の年令、2掛ける8で十六歳の意味ですが、漱石の中では、当然自分の28歳としての意味づけもあっただろうと思われまゝ。ここに引用した最後の行「徒にいう相忘れずと」も、今日の漱石のメッセージ、「そのまま長く余の心臓の真中に保存したい純潔な感情を」だったのだろうと思われまゝ。

スペースの関係でここに引用できませんでしたが、『こゝろ』の「先生と遺書」の、これも第28回に、明治27年漱石が本気で自殺を考えた跡が読める場面があります。小説の中では、先に自殺する友達のKと千葉の海岸を歩く場面です。那古という、『草枕』で那美さんという女性がいる、あの「那古井の里」の那古ですが、これは千葉県館山に実在する地名です。その海岸の岩場での出来事ですが――

私は其所に坐って、よく書物をひろげました。Kは何もせずに黙っている方が多かったです。私にはそれが考へに耽っているのか、景色に見惚れているのか、若しくは好きな想像を描いているのか、全く解らなかつたのです。私は時々眼を上げて、Kに何をしているのだと聞きました。Kは何もしていないと一口答えるだけでした。私は自分の傍にこうじとして坐っているものが、Kでなくて、御嬢さんだったらさぞ愉快だろうと思う事が能くありました。それだけならまだ

可いのですが、時にはKの方でも私と同じような希望を抱いて岩の上に坐っているのではないかしらと忽然疑い出すのです。すると落ち付いて其所に書物をひろげているのが急に厭になります。私は不意に立ち上ります。そうして遠慮のない大きな声を出して怒鳴ります。纏まった詩だの歌だのを面白そうに吟ずるような手緩い事は出来ないのです。只野蛮人の如くにわめくのです。ある時私は突然彼の襟頭を後からぐいと攫みました。こうして海の中へ突き落したらどうすると云ってKに聞きました。Kは動きませんでした。後向のまま、丁度好い、遣ってくれと答えました。私はすぐ首筋を抑えた手を放しました。（『先生と遺書』28）

実際、この明治27年夏、漱石は伊香保温泉から松島、一度東京へ戻ってから千葉へと一人旅をしています。Kのような友達と一緒にいたわけではありません。ですが、初め伊香保温泉滞在中、当時親しい友人でその後東大の美学の教授になった大塚保治という人に温泉まで来てくれと手紙を出します。大塚は当時小屋という苗字で、その後大塚楠緒あるいは楠緒子さんと呼ばれる才媛、この人は才色兼備で漱石より早く文筆活動を始め、明治の文学史にも名がある人ですが、この楠緒子さんのお婿さんになった人です。漱石と小屋がこの楠緒子さんをめぐって三角関係だったとする議論もありますが、どうやらそうではなさそうです。{『こゝろ』のKという頭文字の友人が小屋のKだ、というのがその根拠の一つですが、漱石という作家は『こゝろ』を書く時点で東大の教授である友達のことを、そんなあからさまに小説の中にほのめかすような人ではありません。そうではなくて、} 那古海岸でのKとのやりとりは、漱石の自問自

答だったというのがぼくの読みです。つまり、漱石は自分の問題を「先生」なる人とKとに書き分けているのです。Kは漱石の本名〔金之助〕のKでしょう。『吾輩は猫である』の寒月君のように、漱石の小説には漱石の分身がいっぱいいます。猫の立場から漱石自身を苦娑彌先生として観察したり、「非人情」の立場から那美さんを見たりすることで、自分の問題を客観化するという文学の方法を、漱石は中国やヨーロッパの文学から学んできました。}

7.

ぼくの話の締めくくりをしなければならぬ時間になりました。

1916年11月22日、『明暗』第189回を書こうとして果たせなかった漱石は、228回で完結するはずの『明暗』を40回分残していました。もし漱石が11月22日以降書き続けていたとしたら、丁度この年の大晦日に書き終わるはずでした。それは己の50年の半生を締めくくるに相応しく、28歳で一大転機が訪れてから丁度22年を費やして、自分でも納得がゆく自分の問題に決着をつける小説の完成となったはずでした。

そこでぼくなり、漱石が構想していただろう最後の40回の概略を考えました。5bのあたりですが、これを説明する時間がもうありません。これは皆さんがそれぞれ考えてくだされば、いいのではと思います。{世の中の『明暗』論は山ほどありますが、みんな大したことはありません⁶。皆さんが出る幕はまだまだたくさんあります。漱石先生はいい宿題を私たちに出示してくれました。残念無念にちがいない漱石のために、漱石が書けなかったところを完成させてあげるのが我々の漱石供養です。}

{188回からあと6回分で、丁度後半の80回目に達します。前半の80回目では、お延が津田に向かって、近々私はあなたのために一生一度の勇気を奮うと宣言します。これを受けての後半ですから、今度は津田が決心する番で、それは、この期に及んでは津田には問題を回避するすべがなく、「馬鹿になって進む」というチョイスしか残されていません。彼は清子に対し、彼女が自分から去った真意を質すべく、清子と午後の散歩に出かけます。次の8回分は、場面変わって、時間を遡り、お延が温泉場に向かう部分に費やされます(202まで)。そして次の8回がいよいよ清子と津田の対決になりますが、ここでは津田が自分の命をかけて清子に立ち向かうことになるはずです。「馬鹿になって進まなければならない津田は、あの「一口嘸」の男のように、死を賭けていると本当に口に出し、津田は本気かもしれません。しかし、それが清子に「一口嘸」のお父さんのように全面的に否定されることもありそうです。そのとき津田は本当に死のうと思うかもしれません(210まで)。次の8回分は、そういう二人を木陰に垣間見たお延は、自分の清子に対する先入観(津田が自分を捨てるかもしれない)が大間違いであったこと、清子が自分とは違って、ずっと純粋な心の持ち主であり、それは津田に対する清子の眼の光に明らかだと感じたとき、清子と対決するつもりで来た自分が無意味になり、そして本来の自分、すなわち何が何でも津田を愛するのだと、かつて自分に誓った自分の純白さを取り戻すために、ほとんど夢遊病者のように白いしぶきをあげる滝壺に飛び込もうとする(ここには、漱石夫人鏡子さんの明治31年の入水事件が反映しているかも知れません)。あるいは、津田が飛び込んでいるとすれば、助けに入ることは当然想像されます(218まで)。そして津田(とお延)は滝

壺近くにいたもう一組の男女「浜のお客さん」に救われます。[この男女は、漱石がこの温泉の場面で初めて登場させている以上、しかるべき役割を担っていると考えられます。] お延を見て、津田は彼女が自分のために「勇気」を出したのだ悟り、宿屋での清子との出会いのように硬くなり、また顔面蒼白になるかもしれません。馬車が用意され、二人は宿屋へ運ばれる。天を仰ぐお延に、「天には目的があるかもしれません。そうしてその目的が僕を動かしているのかも知れません」と言った小林の言葉が蘇るかもしれません。それはそのまま、津田を動かし、滝の白さで彼の心を洗ったはずです。ここでは、津田が小林医院の病室で見上げた天井を、今度はお延と一所に眺めることになるでしょう(226まで)。

そしてあと2回のコーダ(228まで)。ここでは二人とも温泉でしばらく湯治する羽目になります。その費用はおそらく、よい結果を約束した吉川夫人がもたなければならないでしょう。しかし、この夫婦が和合するには、この結末しかないでしょう。そして最後に響くのは、藤井家の眞事(まこと)のことばです。

「(藤井)意があるってのはね。——つまりそのね。——まあ、好きなのさ」

「(眞事) ふん、じゃ好いじゃないか」
(31)

藤井の妻お朝は、単純に藤井が好きで結婚しました。子供の眞事は、「じゃ好いじゃないか」というのですが、このお朝の結婚についてのエピソードは、人が結婚するとき、いわば人生の「朝」に、当事者同士の「純潔な感情」としてあるべきものとして、そのまま漱石の『明暗』の結論でもありました。漱石は、読者のために、愛の本質(真言)を、小

説のかなり早い時期(31)に無邪気な子供、その名も「眞事」の口を通して表明していて、それを偶々藤井家に来ていた津田と小林に聞かせていたのです。}

みなさんのお財布の中に千円札があったら出してみてください。今月からこの千円札の漱石は野口英世に変わり、やがて漱石はお札から姿を消します。漱石は日本の近代化にも、政府のすることにも文句がありました。くれるといった博士号を断固拒否もしました。ですから、金之助という名がついていたとはいえ、本心自分がお札の顔なんかになるのはもってのほかとっていたはず。でも、野口英世に変えることを決めた政府の役人って本当に馬鹿ですね。福沢諭吉を下ろしても漱石を下ろすべきではありません。日本近代が生んだ日本人の中で、漱石ほど純白な心の持ち主はいないからです。それも近代化の荒波にもまれて、大団円で予測される津田の変身のように、きれいな心に洗われた人だからです。このお札の原画は一枚の写真で、1912年(大正元年、ということは明治45年と同じ年ですが)9月19日に、漱石が東京京橋の小川写真館というところで撮ったものです⁸。明治天皇の葬儀がこの6日前にあり、漱石は黒いネクタイをつけて(このお札では見えませんが)左の腕に黒い喪章を巻いています。明治の精神とともに殉死した『こゝろ』の「先生」のように、自分の時代は終わったと思っていたのかもしれませんが。表情も暗く沈んでいます。注目していただきたいのは、背広の下に着込んでいる薄いカーディガンで、これもこのお札からはそう見えませんが、じつは真っ白なんです。

やがてここにおられる多くの皆さんは結婚されることでしょう。そのとき、この人をどこまでも愛していくのだというような、「純

白純潔な感情をそのまま長く自分の心臓の真中に保存しておこう」という漱石のメッセージをぜひ思い出してください。この漱石の千円札は、多分千円で買える一番いいお守りです。しかも消費税なしです。一枚だけはいつまでも「保存して」おいてください。ほくもできることならと思って、228番という番号がついた漱石を探しているのですが、まだ見つかっていません。ご清聴ありがとうございました。

- 1 漱石作品からの引用は、すべて新潮文庫本に拠った。その他、漱石のメモなどは、漱石全集本(岩波書店1966)を参照した。
- 2 拙論『『明暗』——漱石の詩と真実』(東京家政学院大学紀要第38号、1998/7) pp.92-93。この小論執筆の時点では、語りの時間に物語の出来事の時間が重なる日本語の伝統に照らして、「後々まで…伝えた」を単に「非文法」としたが、この同じ回に、「…後からこの刹那の光景を辿るたびに、何時でも彼の記憶中に顔を出したがる疑問であった。」という文章も見つかるので、漱石は本気で助動詞「夕」をテンスとして機能させたかったことがわかる。しかし、小説の論理としては、この場面の「後から」起こったことをここに書き込むのは、西欧でもルール違反だろう。少なくとも西欧近代の小説の理想であった、「作者の声を消す」ためには、出来事の時間に語り手の介入があってはならないことだ。ましてや、それがここでの出来事を通り抜けて、来るべき時間に起こったこと(「後から…辿るたびに、何時でも彼の記憶中に」)として書いてしまっただけでは、ここまで営々と築いてきた小説『明暗』の屋台骨が揺らぐ。しかし、この危険を冒しても、ここでの「一種の絵」は、もともと漱石の記憶に保存されていたかけがえのないものだったと思われる。
- 3 大正5年6月10日、漱石は『明暗』の24回目を書いて新聞社に郵送した。連載は5月26日から始まっているので、この日には朝日新聞に16回目が掲載されており、ということは、漱石は丁度8日分しか書き貯めがなかったことになる。

しかし、こうした「8日」分は、この作品の基本構造となるユニットとして、漱石の創作原理の一部だったので、書き進むことに全く不安がなかったのだ。因みに、この日に書いた文言の訂正依頼(「砲声」を「銃声」に)した手紙[漱石書簡#2181、全集第15巻、p.558]からも、作者がこの24(8x3)回目の重要性を意識していたことが窺われる。ここで、津田の従兄弟にあたる「眞事」が、津田に対して放った空気銃の「銃声」が、実は津田に対する警告であり、のちに見るように、眞事の行動やもの言いが、作品の本音であることを、作者はそれとなく示唆しているわけだ。

- 4 拙論「漱石『明暗』の「純白」について」(金城学院大学論集国文学編第42号2000/3)執筆の時点では、「一本の柳の枝」を「白い干物」と同定していたので、柳はお延の象徴だと思っていた。しかし、「後に取り残された」柳(21)とか、「離れにくい過去の匂いのような」柳(89)という表現から類推して、柳は清子の象徴であると、今度読み返してわかった。ここで訂正したい。

特にこの89回の柳は、その前の81回に、津田の外套を貰い受けに現われた小林が、88回までお延を思わせぶりの言いがかりをつけて苛め、津田にはお延の知らない過去があることをほめかしたので、彼女は小林の去ったあと、津田の机の上に泣き伏してしまうという重要な場面の直後に置かれている。泣き止んだあと、お延は津田の机の中に、津田の隠された過去を自分で探る行動に出る。その引出しの中から出てきたのは、夫婦で買い物に出かけたとき、銀座の帽子屋から持ち帰ったパンフレットに描かれた石版画の柳だから、無論表面的には津田の秘密と何の関係もない。そして、実際机や本箱の近辺からは、津田の過去を疑う何の証拠も見つからない。たとえば、津田に来た何通かの(状差しの)手紙からも何も出てこない。しかし突然、これがヒントになって、ある朝津田が古手紙を庭で焼いていたことを思い出すのだ。その手紙の束は、明らかに津田が自分の過去を隠滅するために焼いたのだと、お延にカンが働く場面として描かれている。

そう考えると、50回目にある、お延が岡本に招待されて見た芝居の舞台に置かれている柳は、

「色の生っ白い変な男が柳の下をうろうろ」、更には背景に「白壁」とあるところから、この柳を清子、うろうろしている変な男とは小林、その背景の白壁は、医院またはその延長としてのお延というように、見事な像を結ぶのだ。漱石は、まず「手品師」の後ろに柳を配置することで、清子の存在を芝居とパンフレットという非現実の世界に還元させて、お延の潜在意識と読者の感性にうたえて、この最重要の人物の存在を仄めかしていることになる。ぼくらは、このような漱石の創作術に、あらためて脱帽しなければならぬ。

- 5 『明暗』執筆の少し前、湯河原温泉で療養して帰った大正5年2月16日以降、恐らく3月18日以前に書かれた断片(漱石全集第13巻、『日記及断片』pp.820-1)に、『明暗』の構想に係わると思われるメモが残されている。

「○人はあるものを白だとも云へます黒だとも云へます。…

Perfect innocence and perfect hypocrisy」この「全くの無垢と全くの偽善」は、作品のモチーフとなる「愛と虚偽」に関連づけられれば、主人公津田に内在するもの、したがって、偽善的な津田が最後には無垢なところに洗われる可能性が推測される。

その次の断片は、「○ポセツション」となっていて、これは「女が自分で自分を所有してゐない」（既婚の女はその夫が、未婚の処女は両親が所有）、だから、男は「戀をしても一直線に其方へ進む訳に行かない」とある。清子の結婚の前も後も、津田には「一直線に進めない理由があったことになり、これは、後の「馬鹿になって進む」という津田の決心と重なるかもしれない。

さらに、「○肛門 プレートニツクラツヴの條と連結す」とあって、いわゆる＜Platonic love＞「肉欲を起こさない精神的な愛」は、『明暗』のモチーフと繋がるだろうし、清子／延子をつつにする要素とも関連づけられそうだ。また、「精神界も（物質界と）同じ事だ」（2）と津田に云わせていることから、痔の手術を心の癒しとパラレルに扱う構想も、ここに芽生えていよう。

- 6 『日本現代文学大事典 作品篇』（明治書院1994）の『明暗』の項で、三好行雄は以下のよ

うに言う。「…作中の時間はまだ二週間余しか経っていない。『明暗』を書く漱石は決して先を急がない。…そこに描かれるのは、関係性の地平に閉じられた人間たちの利害であり、感情の波紋である。漱石はおぞましい我執の相を性急に断罪しない。それを執拗に凝視しながら、あくまでも日常的な行為と心理に終始する稠密な描写によって、人間性の不可知の深淵に迫ろうとしたのである。しかし、一六八回で、津田が旅に出て以後、小説の主調低音は明らかに変化し、破局の予感がただよう。」

この先、「津田の体験を媒介して、小説はあらたな展開の原理を用意している、という予想」だが、とんでもない誤読だ。第一に作品の時間は「2週間余」はまだ経っていない。きちんと読めば、188回目は丁度14日目だからだ。だからといって、これから延々と時間を経なければ終わらないことが、どこでわかるのだろうか。ぼくの読みではこの日、あるいはあってもう一日で劇的に終わるはずだからだ。津田が「事実」に戒飭される」（167）のに長い時間は不要だからだ。それは、この小説の折り返し点で、丁度1週間の時間が経過した「事実」があるからだし、作者が周到に用意した188回までの経過から明らかに推測できることだ。

「関係性の地平に閉じられた人間たちの利害」や「おぞましい我執の相」が、この作品の「F」（焦点的印象または観念）ではない。江藤淳と同じように、あるいはその影響を受けて、「我執」ということばの虜になってしまい、主人公の心を追う小説の原理を無視している。ましてや『明暗』は「人間性の不可知の深淵に迫」ろうとなどしていない。単に津田の心を、人が結婚する時に必要な心構え、純潔な感情の原点に立ち戻らせようとしているだけだ。この小説のどこに「主調低音」があり、どこに「破局の予感がただよ」っているのか。こういう口当たりのいい言葉を並べて、文芸の本質を無視する「解説」には、作者がいちばん憤りを感じるだろう。「眞事」に残念なことだが、そもそも文学芸術の原理がわかっていないのだ。

- 7 東京を発つときにあったはずの三つの選択肢（173）のうち、「馬鹿になっても構わないで進んで行くこと」は、津田にとって最後に残された途となるはずだ。それは「微笑して彼の傍ら

に立った」とある。漱石がこの小説で書いた最後の一文、「津田は其微笑の意味を一人で説明しようと試みながら自分の部屋に帰った。」に反響していると思われる「微笑」だ。その173回の末尾は、「洗うとも摩るとも片の付かない手を動かして、彼はしきりに綺麗な温泉をぎぶぎぶ使った。」とある。ほくが「津田の心は最後はきれいに洗われる」とする根拠の一つとなる文言だが、このあと『草枕』の那美さんが風呂場に登場するのと同じように、主人公を驚かさず場面となる。「長い襦袢の派手な色が、惜気もなく津田の眼をはなやかに照した。…是非彼の入っている風呂へ入らなければ承知できないといった調子」で、その後この女性が「浜のお客さん」と呼ばれる二人連れの湯治客の一人であり、清子と懇意であることがわかる。「生糸屋夫婦」というのだが、本当に夫婦なのかどうか（と津田も疑っているが）、男の方が女から義太夫を習っていたりする。ここでの作者の意図は、清子とこの女性、更には津田とこの商人を何らかの意味でパラレルに扱いたいということだ。だから、このあと清子と再会する場面で、清子は、「赤だの青だの黄だの、色々の縞が綺麗に通っている派手な伊達巻を、寧ろずるずる巻き付けた儘」（176）現れるし、男の方はお秀の夫の堀庄太郎のようだと津田に思わせている（178）。お秀がここで関係づけられるのは、関と堀が性病治療のために小林医院に来たことがあり（17）、この関とは医院からの帰り、「性（セックス）と愛（ラヴ）」について議論したとあるからだ。

このことは、お秀同様、清子にも玄人っぽい（あるいは、性と愛を区別する）見方があるのかも知れず、それはある「余裕」を彼女がもっているということにもなり、もう一つの「微笑」の意味（「清子はただ微笑した丈であった。其微笑には弁解がなかった。云い換えれば一種の余裕があった。（184）」）とも繋がりそうなのだ。そこで、<Platonic love>と漱石が書き残したメモ（上の注5）の意味がわかるように思う。津田がプラトニックな愛の対象として清子を想っていたときに、関が「所有」の対象として清子を攫ったのだと。それは『こゝろ』のKが精神的な価値観を絶対視していたところへ、「先生」が「お嬢さん」を「所有」しようとしたことと

基を一にすることのように思えるからだ。この二面性は、当然お延の中にも、いやどんな女性の中にも内在していることであり、したがって津田にとっては、この二人の女性が二人とも精神的な愛と夫の「所有」に帰する肉体とをもっているという現実を受け入れるしかない結末が予測できる。それは、<perfect innocence and perfect hypocrisy>が双方ともに、現実にはありえず、相対的な立場に落ち着かざるを得ないことだから、清子の現在を容認し、津田の現在をも受け入れなければならないという認識に至らざるを得ないことなのだ。結局、夫婦のありようは、お互いに対して「純潔な感情」を持ち続けるしかない。

- 8 原武 哲『喪章を着けた千円札の漱石——伝記と考証』（風間書院2003）pp.1-19。